

第3章 三山の森林の歴史と現状

1 三山の森林の歴史

(中世～近世)

中世から近世にかけての森林の状況は、文献としての記録はほとんどありませんが、室町時代後期に描かれた洛中洛外図においては、柴を運ぶ人物絵や鷹狩りが描かれていることから、森林は柴（コバノミツバツツジ類）の生息する、見通しがよく、高木林が決して多くない、明るい環境の山地であったと推定されます。



再撰花洛名勝図会の挿絵（一部）

さらに、江戸期を中心とした数々の名所図会からも、三山は疎林^{※1}の状態であったと推察されます。これは、森林が燃料を中心とする木質資源の供給の場として、市街地周辺の森林には常に手が入れられてきたことを意味します。そして、主要な景観木であったアカマツは、祇園祭の山鉾や五山の送り火で使用され、主たる燃料のひとつであった柴は、鞍馬の火祭においても、大松明や小松明に用いられてきました。

(明治)

明治時代に入り、社寺は、明治4年（1871）に出された社寺上知令（社寺のもつ社寺林の国有化）により、大きな収入源を失うことになりました。それまで、比較的荒廃地が少なかった社寺林は、社寺の収入を確保するため、上知前の伐採が広範囲で行われた結果、京都の景観に大きな影響を与えました。その結果、官有林を禁伐とすることで三山の森林を保護しようとしたしましたが、積極的な景観保全が行われたわけではありませんでした。そうした状況の中で、保勝会等による名勝地への植林や京都府による名勝地官有林の公園化計画など、近代における景観保全の動きが生まれてくることになります。

(大正)

大正時代から昭和初期にかけては、明治以降の無秩序な市街地の拡大をくいとめるため、都市計画諸制度が整備されていくことになります。大正9年（1920）に都市計画法が施行されたことに伴い、都市計画に関する審議が本格的に始まり、三山は京都の景観の重要な要素として、積極的に評価される存在となりました。そして、大正11年（1922）に四条烏丸を中心とする半径約2.3kmの広範囲な区域が都市計画区域となり、その中に多くの森林が含まれるものとなりました。

(昭和以降)

このような、京都の市街地を取り囲む自然への評価は、昭和5年（1930）に指定された約3,500ヘクタールの風致地区へ受け継がれ、翌年及び翌々年の追加指定を加えると、三山の山ろく約8,000ヘクタールが風致地区となり、山々とその山ろくの風致の維持が不可欠となりました。

一方では、全国的な交通機関の発達により観光が流行し、各地で観光地が開発されました。京都市は全国に先駆けて昭和5年（1930）に、観光課を設置し、風光明媚な観光都市として、三山を背景とする景観の持つ経済的価値が高められることになります。それに伴い、市街地近郊の山林での森林施業は大きく変化し、景観に配慮しつつ、京都の独自性を守ると考えられていたアカマツ林を存続させ、経済的なマツタケの生産との両立を図るとともに、モミジやサクラ等の鑑賞樹とスギ・シイとの混交林を模索していきました。

しかし、昭和9年（1934）に襲来した室戸台風は京都市域にも大きな災害をもたらしました。三山の森林への被害も大きく、特に景観的な中心地である東山では、清水寺から知恩院方面に甚大な被害をもたらしました。この事態を受けた東山国有林風致計画（大阪営林局（当時））は、現状への復旧とともに、外部からの眺望や丈夫な森林とするための複層林^{※2}の造成及び社寺の背景林への配慮等を主眼として作成されました。

太平洋戦争前後においては、過度の伐採がなされ、はげ山的な状況となりましたが、その後、順次アカマツ林が成育する森として回復していきました。しかし、昭和30年代からの高度経済成長期における開発の波は京都にも押し寄せ、京都市の双ヶ岡の開発問題が一つの契機となり、古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（いわゆる「古都保存法」）が昭和41年（1966）に制定された結果、現状凍結的な保存は前進することとなります。



室戸台風後、神社に植えられたクス

その一方で、生活様式の変化、主に昭和30年代に急激に進んだ燃料革命といわれる変化は、燃料の供給元である三山と人々の生活との関係を絶つこととなり、加えて木材価格が低迷する状況の中で、手入れが行き届かなくなった森林はその林相を急速に変化させていきました。その結果、アカマツ林は相当衰退し、アカマツに代わり成長した常緑広葉樹が森を覆い、下層植生^{※3}がより単純化する等、様々な弊害を生む状況となっています。

一方、貴船や鞍馬、比叡山等の社寺林はその神苑としての性格から、局所的に手が入らない森林として継続し、比叡山のモミ林等の自然植生を多く残した形で現在においても存在しています。

※1 疎林： 樹木の数が少ないため、枝葉の密度が薄い森林のことで、太陽の光が木々の間から地面まで差し込むことから、地表近くにも比較的多くの植物が生育する明るい森林となります。

※2 複層林： 樹種や樹齢が異なる樹木によって形成された森林のことで、最も高いところで枝葉が重なり合っている層から順に高木層、亜高木層、低木層、地表近くは草本層といえます。

※3 下層植生： 森林の地表付近に生える草類を中心とした植物群のことで、手入れが不足している人工林では、太陽の光が地面まで届きにくいとため、下層植生が育ちにくくなります。

2 三山の現状と課題

かつて人々の生活との関係により成り立っていた三山の森林は、前述のように近年においては、用材や薪炭の需要はほとんどなく、北山杉の生産以外、人手が加わることがなくなりました。三山にみられる大きな変化を整理してみます。

(1) 現状

ア シイ林の拡大

(ア) シイの繁茂による下層植生の喪失

アカマツ林が衰退し、その跡に常緑のシイ林が増え、東山においては、約40年間で約4.7倍に拡大しています。

シイ林の林床は、光が遮られるため暗くなり、下層植生が失われることから、単純な林相になっています。



大文字山付近のシイの繁茂状況

イ 森林病虫害の蔓延

(ア) 松くい虫被害の蔓延によるアカマツ林の衰退

三山では1970年代から被害が広まり、現在でも継続しています。東山ではアカマツ林がなくなるほどの被害を受け、北山や西山においても、アカマツ林が衰退しています。



小倉山の被害状況

(イ) カシノナガキクイムシ被害の蔓延によるナラ類樹木の大量枯損

平成16年に將軍塚付近でカシノナガキクイムシによる被害が確認されて以来、急激に蔓延し、平成22年の枯損本数は約17,000本に上ります。



大文字山の被害状況

ウ シカによる食害

(ア) 食害による枯損等により、森林の世代交代が途絶

シカは、枝や葉を食べるだけではなく、大部分の新芽を食べたり、樹皮を剥ぐ等により、森林の存続に重大な脅威を与えています。例えば、チマキザサの多くが、繰り返される食害によって失われる等の被害が顕在化しています。



食害によって枯れたヒノキの幼樹

エ 放置森林の増加

(ア) 森林の荒廃に起因する斜面の不安定化や景観阻害

木材価格の低迷が長く続いていることに加え、輸入木材との競争の中で、森林に対する投資資金の回収が難しくなった結果、手入れされず放置された森林が増加し、斜面崩落や幹折れ等が発生しています。



間伐されていないスギ人工林で発生した大量幹折れ

(2) 課題

このように、一見、緑豊かに見える森林も、人との関わりの中で形成されていた森林に手が入らなくなると、貧弱な樹木ばかりになったり、特定の樹木が繁茂するようになるなど、森林として多様性の少ない不健全な状態に陥り、カシノナガキクイムシによる被害の蔓延や、生物多様性、防災の観点から大きな課題が生じることになります。

また、かつては景観の主要な樹木であったアカマツは、京都の景観を代表するものとして文化的側面からも必要不可欠な存在であり、その再現が課題となっています。

古都京都の重要な構成要素である森林が、人々の知らない間に変化してしまい、治山治水機能が低下し、山腹崩壊などの危険が生じる前に、人の手を入れることで自然の理にかなった、安定した、健全で美しい森林に導き、森林が持つ多面的な価値を回復させることにより、市街地からの景観を改善し、観光にも貢献できる、京都に相応しい森林景観を創出することが必要となっています。



市街地上空から大文字山を望む（平成18年8月撮影）